



ひとう



海援隊旗(二曳きの旗)

http://www.ryoma-kinenkan.jp

日 日 HIBI ZENSHIN 前 進

森館長10年の足跡 名実ともに「龍馬の殿堂」に

新しい年の幕開けです。記念館にとっても今年には本格的な博物館施設としての動きが目に見える年となります。いよいよこの夏から新館建設の基礎工事が始まり、来年1月から1年間、記念館は休館します。2年後の平成30(2018)年1月予定で、新しい坂本龍馬記念館が新設及び既存館のリニューアルを終えてオープンします。新館はしっかりと龍馬資料をご覧いただく博物館、既存館は小さな子どもたちも歴史の入口として楽しめるパフォーミングスズと、二つの対照的な館が並びます。皆様にはご迷惑もおかけいたしますが、どうか今まで以上の応援をよろしくお願いいたします。

10年を振り返って

さて、一面に躍る書家・沢田明子先生による題字「飛騰」が初めて掲載されたのは、平成17(2005)年8月のことでした。それはまさに森健志郎館長就任のときでした。以来、この巻頭言をはじめ、記念館の指揮官として10年の歳月を刻み、新館建設へ向けた取り組みに心血を注ぎました。

昨年11月2日、森館長はこの「飛騰96号」の面割りをしました。巻頭言はご自身や記念館の10年を振り返るものという組立。その夜の急逝でした。

今、記念館の新しい動きの中で、改めてこの10年間の「飛騰」を読み返してみました。記念館にも、「飛騰」にも森館長の「眼」が隅々に在りました。それは、時代を読むまなざしそのものです。

森館長は、坂本龍馬を今に生きる私たちとダイレクトに結ぼうと、龍馬発信を大きく掲げました。揺れる時代を、平成の幕末ととらえ、自由平等平和のちのちというキーワードで龍馬とつないだのです。発信はまず高知県民の



皆さま、来館者の方たちへ。そして日本から海外へと及びました。そこには就任早々の指定管理者制度による公募という大波を乗り越える使命がありました。館内展示の見直し、脆弱だった収蔵庫建設、龍馬書簡をはじめ大量の土佐藩邸資料の購入など、研究部門の充実。今では当たり前となった、年間を通じた企画展開催や年中無休。開館20年の節目には桂浜の龍馬像以来、単体での本格的な銅像「シェイクハンド龍馬像」も誕生しました。あの時もこの時もいつも記念館には森館長がいました。

初代小椋克己館長は、この記念館を「龍馬の入口」と位置づけ、龍馬書簡の収集展示に着目。自ら館内解説をする声は記念館名物でもありました。

龍馬の殿堂へ

初代小椋克己館長は、この記念館を「龍馬の入口」と位置づけ、龍馬書簡の収集展示に着目。自ら館内解説をする声は記念館名物でもありました。

森館長は就任時の巻頭言で「記念館所蔵の目玉は龍馬の手紙である。手紙を巧みに読みこなし、説明を聞く人を感動させたという前任者小椋さんの迫力をひしひしと感じる」と言っています。森館長その人も龍馬の手紙をそらんじ、なおかつその心情に迫っていました。その熱い思いが記念館を「龍馬の殿堂」へと発展させてきたのです。

前号の「こは館長の部屋」では、第3回夏休み子ども龍馬フォーラムに触れて書いています。「20人の子どもたちが20年集えば400人の仲間ができる。この400人が世の中のリーダーとして動いていくだろう」というのが口癖でした。子どもたちのための、現代龍馬学会のための、みんなのためのホールが新館にはつくられます。そこは過去から未来を語り合う場になるはず。さあ、新しい植音が聞こえるようです。進まなくてはなりません。そんな思いで四字熟語は「日日前進」としました。本年もよろしくお願いたします。

前田 由紀枝

飛騰の紙面にスマホをかざして動画を見よう!

視聴方法は簡単!

- ① 右のQRコードから無料アプリ「COCOAR2」をダウンロード
- ② アプリを起動し、マークのついた写真にスマホをかざす

※端末の環境により、イメージが認識されるまでに時間がかかる場合や、正常に動作しない場合があります。
※本コンテンツは2016年3月31日まで閲覧可能です。



「拝啓森館長殿」

「初めてとは思えない意気投合」

元台湾総統・李登輝

高知県立坂本龍馬記念館の森健志郎館長の急逝の報に接し大変驚きました。2009年9月、日本青年会議所の招待により、東京で坂本龍馬の「船中八策」をテーマにして講演することとなり、せっかく訪日するならばということ、龍馬の故郷である高知にも伺ったのが森館長とご縁の始まりでした。若くして明治維新の立役者となった龍馬を慕う者同士、初めてとは思えないほど意気投合したのを覚えております。今まさに混迷する国際社会において、日本も台湾も、龍馬のような信念をもって改革をなしとげられる人材や精神が必要とされています。そのような時期、龍馬の情報発信に尽力されてきた森館長のような存在を失うことは大変残念でなりません。

「会うたびに大きな勇気を」

ソフトバンクグループ代表取締役社長・孫正義

森館長は、私が敬愛してやまない坂本龍馬の功績の伝道師であり、龍馬を誰よりも深く理解なさっておりました。今年には龍馬生誕180周年で各種イベントに精力的に取り組まれており、私も15日のイベントに参加させていただく中でお会いできるのを楽しみにしておりましたので、突然の訃報にまだ信じられない思いです。個人的に何度も一緒にご一緒いただき龍馬談義に花を咲かせましたが、お会いするたびに龍馬の志について再認識し、大きなビジネス判断時の勇気をいただいたものでした。多くの方に勇気を与える生き様やお人柄も素晴らしい、今後はこのような機会がもてないかと思うと本当に悲しくなりません。

「反骨と優しさが同居する土佐人の代表」

映画監督・大友啓史

あまりのショックに言葉にならない。11月15日に行われる「レッツゴー!ハンドインハンド2015」つなぐぜよ!「PEACE」の準備のため、奔走中の急逝だったとお聞きしました。僕は次回作の撮影で参加できないため、東宝スタジオのプロジェクトチームで森さんから依頼されていた「龍馬への手紙」に筆を入れようとしていた矢先、隣に座っていたマネージャーから訃報を聞きました。そのタイミングには驚くばかりです。飾り気のないおさらばの言葉の端々に愛情が滲み出る、そして、反骨と優しさが同居する、僕にとっては「土佐人」のある意味代表の様な人でした。森さんが作り上げた桂浜と太平洋を見下ろす龍馬記念館は、自由と平等と優しさ、そしてそれを実現するために立ち塞がる世界の現実すら厳しく見据えようとした素晴らしい空間だと思えます。とにかく嘘だろと思いつつ、心から冥福をお祈りするしかなく、愛情の深い、そして龍馬のように、本当に優しく懐の大きな方でした。最後に一言、もう二度お会いしたかったです。

「こじやんとやる人」

ジョンマン研究家・北代淳二

「どうぞよ。やりゆうかよ。」森さんとの電話はいつもやり取りを始めるのが常でした。11月1日、いつものように電話をして、翌日高知である会合に出ることになったので3日に会おうと約束しました。「どうぞよ」と私がかけた電話に、「こじやんとやりゆうぜよ」と言う森さんの明るい声が耳に残っています。15日の龍馬の記念日の前日、孫正義さんが来てくれることになったと喜んでいました。森さんの命日となった11月2日午後、私は東京から高知へ着きました。全くの偶然とは言え、彼が最後に私を呼び寄せたように思えてなりません。ジャーナリストとして、龍馬記念館館長として、森さんは自分の信じたことを「こじやんと」やる人でした。彼の急逝が残念でなりません。

「龍馬愛を日本から世界へ」

歴ドル・美甘子

森館長、今はどうされていますか?天国で落ち着いて過ごされているでしょうか?あまりにも突然の訃報に驚き、実感が湧きません。けれど先日龍馬のハンドインハンドに参加して、館長の笑顔のパネルを見たら、今ここにきて館長は居るなと胸がいっぱいになりました。歴ドルとして初めて龍馬記念館を訪れた際は、少しづつ知らず知らずのうちに、龍馬の愛が受け入れられるかしら!?と不安に思ったことも、今では懐かしい思い出です。それからは行く度に温かく迎えてくださって、勝手に高知のお父さんのように慕っていました。龍馬愛を日本から世界へ。館長自身が龍馬のように本当に活躍されて、感謝しかありません。龍馬記念館も新館へ。さらに活気づきますよう、館長の思いを引きつぎ、応援いたします!

「頼むぜよ」に込めていく」

現代龍馬学会会長・片岡雅文

森健志郎館長が亡くなられて日数が過ぎましたが、あまりに唐突な訃報だったので、いまままだ信じがたい思いがします。現代龍馬学会も、森さんの発案で2009年に発足し、その意志と情熱に牽引されて、ここまで続けてこられました。この先のことを考えると、明らかになりたくて闇夜を歩いていかねばならないような不安を覚えますが、弱音を吐くと森さんに怒られそうです。「頼むぜよ」が森さんの口癖でした。これからも頑張り、その声に応えていかなければなりません。

「館長は龍馬と同じ場所にいる」

東京・吉祥女子高等学校2年 西内茉澄

先日、森館長の訃報を知ったとき、あまりのショックにそれが本当のことだとは思いませんでした。今でも信じられなくて、まだ困惑しています。でも、それはあなたが間違っているのではないんじゃないかと私は思います。私が初めて龍馬記念館に伺ったとき、「ここに龍馬はいる」と確信しました。きっと館長も、同じ場所にいる。そこで龍馬と語り合っているのではないのでしょうか。龍馬に、そして館長に会うために、私はまた龍馬記念館に向います。

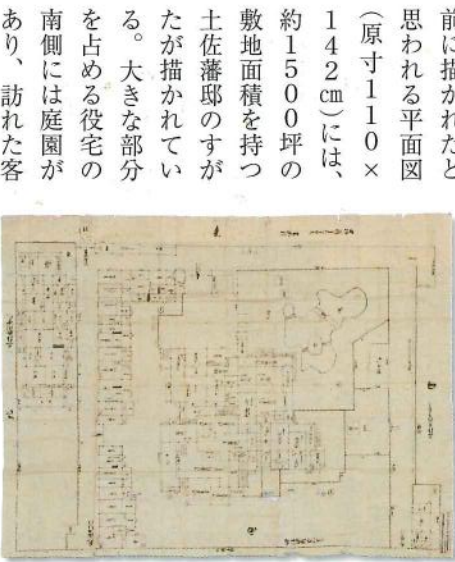
「藩邸史料に見る 幕末の京都」展

展開と見どころ

平成21年に当館に収蔵された土佐藩京都藩邸史料(574点)については、平成24年度に「土佐藩探索御用役がみた幕末」展「京都藩邸史料から」と題してお披露目の展示を開催し、同時に史料目録も刊行した。今回の展示はそれに続く第二弾である。前回、「寺田屋事件」や「勤王党弾圧」といったトピックで展示をおこなったが、今回は幕末の京都に着目し、藩邸で暮らした土佐藩士たちの様子や京都の町、幕末ならではの事件にちなんで展示をおこなう。

平面図から見る 土佐の侍たちの暮らし

今回目玉となるのは、京都河原町にあった土佐藩邸の絵図面(パネル展示:安芸市立歴史民俗資料館蔵)である。幕末以前に描かれたと思われる平面図(原寸110×142cm)には、約1500坪の敷地面積を持つ土佐藩邸のすがすがしい様子が描かれている。大きな部分を占める役宅の南側には庭園があり、訪れた客



京都藩邸図面

が池を眺められるようになっている。役宅の脇には、藩士たちが生活した長屋があり、「定小者部屋」「年季夫部屋」などの文字が見える。部屋の間取りや広さ、井戸や雪隠(トイレ)などの位置も細かに記されており、単身赴任で土佐からやってきた侍たちの暮らしをイメージすることができ、今回は原文書の保存状態を考慮し、パネル展示と

幕末の京都に着目

藩邸史料には、役や身分によって門限が異なるという出入りの規定を記したものの、実際の出入りを記した横帳、同じ日付で20通以上提出された根に登って見物してはならないという注意書きを記したのもある。こうした資料から、幕末の京都で暮らした土佐藩士のような紹介したい。また、会津藩士との間で起きた明保野亭事件や、新選組に関する資料として池田屋事件の調査なども展示する。



屋根に登って火事見物は禁止

「坂本家・家族の絆」展の残したものの 龍馬とともにいた坂本家のすげえ

10月から始まった「龍馬の良き理解者」坂本家・家族の絆」展はまもなく終了する。正月三が日を過ぎれば、龍馬が最も愛したと伝わる脇差がまず展示ケースから姿を消す。(企画展は1月22日まで)。

今回の企画展は生誕180年に合わせて予定していたものであったが、昨年6月に坂本家(札幌市)から、同家にあるすべての龍馬関係資料を当館に預けるというお申し出を受け、その資料の一部を公開するものとなった。その坂本家文書は、私自身10年間おつきあいさせていただいた資料群が大方であった。ところが、搬出当日に同家の方たちから「こんなものもある」と渡されたのが、坂本家7代目・坂本弥太郎氏のトランク。その中に新しい発見があった。龍馬顕彰への貢献が高かった弥太郎氏だからこそ資料である。



まず、龍馬が二度の江戸剣術修行で渡された北辰二刀流の免許状(兵法目録及び同皆伝書)の存在確認。今までは北辰二刀流の長刀(なぎなた)目録しか確認できなかったため、剣術修行の腕前を疑われていたが、ま

まず、龍馬が二度の江戸剣術修行で渡された北辰二刀流の免許状(兵法目録及び同皆伝書)の存在確認。今までは北辰二刀流の長刀(なぎなた)目録しか確認できなかったため、剣術修行の腕前を疑われていたが、ま

有志による「お別れの会」を、2月2日(火)午後1時から記念館隣の国民宿舎・桂浜荘で開きます。参加自由。お香典等はご辞退いたします。

レッツゴー!ハンドインハンドに全国から集合 つないだぜよ!!1,000人の“握手の鎖”

2015年は龍馬生誕180年。数年に一度の巡り合わせで、11月15日は日曜日になった。今回で4回目であるレッツゴー!ハンドインハンドは「つなぐぜよ! PEACE」を合言葉に、過去最高人数である1,000人でつながることを目標に準備してきた。これまでの最高人数は第1回目の900人。今年は何と1,000人という節目の年。ソフトバンク社長・孫正義さんの参加も決まり、日を追うごとに参加申し込みは増えていった。参加整理券も急遽500枚を追加するなどの期待と不安を胸に当日を迎えた。



ハンドインハンド起点の桂浜龍馬像



ハンドインハンド終点のシェイクハンド龍馬像

前日まで降っていた雨はあがり、11月とは思えないほどの暖かさだった。6時半の受付開始から、気付けば桂浜の龍馬像前は数多くの龍馬ファンで溢れていた。この記念すべき日に、孫正義さんをはじめ、郷土坂本家10代目坂本匡弘さん、龍馬記念館の設

計者高橋晶子さん、北海道浦臼町の齋藤純雄町長、クラシックギターデューオいちむじろなど様々な方が駆けつけて下さった。孫正義さんは、11月2日に急逝した森館長が愛用していたオレンジ色のスタップジャンパーを着用し、森館長の思いも背負い参加して下さいました。
「ここに居る人の共通点はみんな龍馬が好きという点」
孫さんの挨拶の中にこの言葉があった。今ここに居る年齢も性別も出身地も違う人たちが龍馬を通じて繋がっていることを再確認できた。8時半、みんなが握手で繋がりを、孫さんに続き、現代こころ八策を唱和拍手や歓声が起り、桂浜が一つになった。



笑顔のちびっこ“りょうま”たち



孫さんの挨拶には人だかりが



シェイクハンド龍馬像と握手をする孫さん



鮮やかな握手の鎖

桂浜の龍馬像から龍馬記念館前のシェイクハンド龍馬像までの540mは、なんと1,020人もの握手の鎖ができていた。手を繋ぐことで、人が人を思いやり、協力し助け合う事の大切さを感じ、さらには力を合わせることで一歩前進する勇気を持って、多くの人に、龍馬スピリットを感じて頂けたのではないだろうか。思うように進まなかった部分もあったが、何とか目標1,000人を達成することができた。参加して下さいました皆様、本当にありがとうございました。

小島 千穂

龍馬に届け! 一筆啓上龍馬殿

ハンドインハンドの中で、「一筆啓上龍馬殿」というコーナーを設け、参加者の皆さんに龍馬に宛てて手紙を書いていた。

「龍馬さん、お誕生日おめでとう」「今日ここで復活してください」と、「なぜ戦争はなくなるしない?」「少林寺で黒帯を取れるようにがんばります!」など、手紙の内容は自分の思いや決意、願いなどさまざま。龍馬の似顔絵が添えられていたり、写真を切り貼りしたものや、目の御不自由な方が書いてくださった点字の手紙もあった。また集まった手紙の中には森館長に宛てた手紙も多く見られ、「館長ありがとう」「館長の意志を継ぎ、志を繋ぎます」など、館長への感謝の気持ちも多数寄せられた。

一枚一枚に皆さんの龍馬に対する気持ちが溢れ、今なお龍馬が色褪せることなく皆さんの心に存在していることを実感できた。
手紙はつなぎ合わせて、平成30年にオープンする新館に展示する予定である。
小島 千穂



真剣な表情で手紙を書く少年

大石神影流剣術演武と体験

幕末土佐から吉田東洋、樋口真吉らが学んだ、福岡柳川の剣術流派である「大石神影流」の剣術演武と体験が、宗家直門道場「貫汪館」の5人の先生方により、11月15日午前と午後の2回、八策の広場にて行われた。



演武開始の館内放送に、続々と見学者が集まり、剣術に興味を持つ人の多さ、年代の幅広さがうかがえた。分かりやすい解説を交えながら、古法に則った凛とした所作も美しく、気迫の込められた掛け声とともに剣を打ち込み、特徴的な突き技や気合で相手を圧する動きなど様々な要素のある形を次々に披露した。基本の手数(形)「試合口」や「鞘之内」といわれる真剣による立居合等、観衆は目の前で繰り広げられる迫真の演武に見入っていた。
演武後の体験には、この機会にと小学生から年配の方、着物姿の男性まで多数の希望者があった。基本の手数や構えのていねいな指導のもと、参加者たちは二人一組で練習用の木刀を真剣な面持ちで握り、慎重に足を進めて剣を構えていた。
手島 ゆか

そんな幕末もありかもしれない!? 劇団 志士座乙女座 参上!

「桂さん、西郷さん。シェイクハンドじゃ薩長同盟、ここに成ったがよ!」
皆様、ご機嫌いかがですか? 劇団 志士座乙女座でございます。昨年度公演『維新夜明け前～風雲!薩・長・同・盟!～』も多数の方々にご覧いただき、まことにありがとうございました。
「史実にある程度忠実に、逸れるところは大胆に。」をモットーに活動を初めて早5年。まだ自己満足の域を出ませんが、徐々に本格的な時代劇に近づこうと、仕事も居住地もばらばらの役者・スタッフ総勢8名で頑張っております。
毎年11月の龍馬生誕イベント、ハンドインハンドに合わせ、高知県立坂本龍馬記念館にて年一回芝居を開演、近江屋のセットで所せましと幕末の名場面を再現します。
今年の11月も、同じ顔ぶれで、皆様にお会いできることを楽しみにしております!
劇団志士座乙女座 座長 楠本 剛



西本 有里

ファイナレは、 夜空を照らすよさこい、 そして花火と尺八の饗宴

11月15日夜、龍馬記念館開館イベントを締めくくると、毎年恒例のよさこい踊りと静岡県三ヶ日町の手筒花火、そして、今年初参加となる尺八奏者・吉田長生さんによる演奏。昼間の演舞とは味違う華やかさと力強さで魅了し、よさこい踊り、心の悲しみや悩みをうとくかしてくるようにな花火と尺八の音色が波打つ太平洋と満天の星空に響き渡った。私もよさこいの一踊子として演舞に加わった。私事だが、この場に立ち会えず、急逝した故森館長にも、この踊りが届くようにと精一杯踊った。
豪華な顔ぶれが揃った饗宴のあとは、いままさに打ちあがったばかりのまだ熱のこもった厄除けになるという手筒花火をみなさんにお配りした。受取ったみなさん全員の顔がほころんでいた。その傍ら満面の笑みを浮かべる森館長の姿が見えた。初めて最後の決して忘れられないイベントが幕を閉じた。



華やかな顔ぶれが揃った饗宴のあとは、いままさに打ちあがったばかりのまだ熱のこもった厄除けになるという手筒花火をみなさんにお配りした。受取ったみなさん全員の顔がほころんでいた。その傍ら満面の笑みを浮かべる森館長の姿が見えた。初めて最後の決して忘れられないイベントが幕を閉じた。



美しい光を放つ手筒花火

■「海見える・ぎゃらりい」開催100回を超えて」

2005年11月5日にオープンした“海見える・ぎゃらりい”は、県外入館者の多い記念館へ、高知出身の作家の方々を紹介することで、より多くの高知の方に館へ足を運んで頂きたいという思いから作られた。

私が携わるようになった11回目の展覧会から現在に至るまで、高知ゆかりや県外も含め多くの作家の方々に、龍馬をイメージした世界を個性豊かな作品として展示頂いた。その表現方法は様々で、油彩・書・立体・写真・現代俳画・工芸・挿絵・ポトシップ・ちぎり絵・彫塑・イラスト・帽子・漫画・日本画・切り絵などに及ぶ。また、展覧会に因んだイベントも共に開催された。そして作品は勿論、作家ご自身や関係者からも色々なお話を伺い、貴重な経験をさせて頂いている。

企画展「幕末写真館」展は、ぎゃらりいも含め、館の2階全てを写真館として、土佐和紙に大きく引き伸ばした古写真140点を手作業で1枚1枚パネルに貼り展示した。当時はぎゃらりいの担当が私1人だったので、故森館長が作業や展示をいつも手伝ってくださった。そんな作業も懐かしく思われる。大きいものは2m×3mもあり、今も館内には当時のパネルが展示されている。またこの時、「幕末写真館」展の写真が土佐電気鉄道の車体広告として高知市内を走り抜けた。そして、この時に始まった当館アンケートの「幕末のお気に入りの人物を教えてください」の集計結果が「幕末の志士人気ベスト10」展であり、お客様が熱心に見てくださる展覧会として毎年開催している。

「吉松八重樹 故郷との出会い」展・「挿絵原画」展では、高知市浦戸出身の画家吉松八重樹さんの挿絵原画と油彩を2回の会期に分けて約400点展示した。段ボール箱一杯の作品が埼玉から何箱も届いた。地元での展覧会開催と30年振りの帰高（当時82歳）が重なり、くしゃくしゃの笑顔だった。

「海見える・ぎゃらりい」へ行ったら龍馬もアートも楽しめる“龍馬とThe Arts（芸術）”な空間を目指し、さらに深い経験を重ねていきたいと思う。



“海見える・ぎゃらりい100回記念”展示風景

中村 昌代

海見える・ぎゃらりい



「新しい靴で歩く」



「Planetary Souls / Gecko」

■「“幻想 Ryoma 海廊” サトウユキエ」個展

現在、海見える・ぎゃらりいでは昨年12月1日から始まった「“幻想Ryoma海廊”サトウユキエ」個展を開催中だ。花鳥や風景を題材とした幻想的な作風の切り絵作品約20点が展示されている。和紙や画用紙の優しい紙の質感と重ねられた紙の色が相まって独特な世界を作り出している。

タイトルにもあるように“Ryoma 海廊”は記念館をイメージして付けられている。「新しい靴で歩く」は、記念館の展示が決まり、はじめに制作した作品だそうで、龍馬のブーツを花と鳥が囲み、黄色の明るい色がベースとなり「これから何ができるだろうか？」という自身の思いが伝わって来そうな作品である。また、色調豊かな花や鳥が並ぶ中、「天命」という作品は、まるで龍馬自身が心の中に桂浜の海と景色を想い描いているかのように、龍馬が静寂に表現されていると思う。ぎゃらりいに立ち寄られた皆様には、作品を通してどんな「Ryoma海廊」が見えるだろう？

会期は1月31日までです。どうぞお楽しみ下さい。 中村 昌代



「あなたへの手紙」



飛騰の紙面にスマホをかざして動画を見よう！

視聴方法は簡単！

- ① 右のQRコードから無料アプリ「COCOAR2」をダウンロード
- ② アプリを起動し、マークのついた写真にスマホをかざす

※端末の環境により、イメージが認識されるまでに時間がかかる場合や、正常に動作しない場合があります。

※本コンテンツは2016年3月31日まで閲覧可能です。



入館状況

2015年12月20日現在（開館以来8,758日）

- ◆総入館者数 3,773,076人
- ◆最多入館 (2010年5月2日) 6,686人
- ◆最少入館 (2004年10月20日、台風のため) 8人
- ◆2015年度最多入館(2015年5月4日) 2,429人
- ◆2015年度最少入館(2015年7月17日) 74人

編集後記

龍馬生誕180年の年の瀬。慌ただしく、また夢のような一年だったと振り返った。職員一人ひとりのがんばりが、記念館の試練を乗り越えたと言って過言ではない。前号で「これほど疲れた編集はない」と言っていた森館長の言葉を、増ページによる“苦勞”だと流していなかったか。今まで自分は何を見ていたのか。見過ごすことで甘えていなかったか。思うことしきりである。

新年、気づきを新しい行動につなげよう。これからです。

(ゆ)

館だより“飛騰”第96号（年4回発行）表紙題字：書家 沢田 明子氏

発行日 2016(平成28)年1月1日
 発行 公益財団法人高知県文化財団
 〒781-0262 高知市浦戸城山830
 TEL (088)841-0001 FAX (088)841-0015
 http://www.ryoma-kinenkan.jp
 高知県立坂本龍馬記念館
 「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休

入館料 一般500円・高校生以下無料

身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・
 戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者1名
 高知県・高知市長寿手帳所持者は無料

館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、92円切手5枚をお送りください

私のテーマ

兆民と龍馬

現代龍馬学会 会長
片岡 雅文



2人の出会い

中江兆民は弘化4年(1847)の生まれだから、天保6年(1835)生まれの坂本龍馬より12歳年下だった。兆民にとって龍馬はすいぶん大人に見えただろう。

二人が出会ったのは長崎で、慶応2年(1866)ごろのことといわれる。

そのときの思い出を、兆民は後年、弟子の幸徳秋水に語った。秋水の『兆民先生』につづられた次の節は、よく知られている。

「先生曾て坂本君の状を述べて曰く、豪傑は自ら人をして崇拜の念を生ぜしむ、予は当時少年なりしも、彼を見て何となくエラキ人なりと信ぜるが故に、平生人に屈せざるの予も、彼が純然たる土佐訛りの言語もて、『中江のニイさん煙艸を買ふて来てオーセ、』など、命ぜらるれば、快然として使ひせしこと屢々なりき」

そのころ、兆民は数え年で20歳、龍馬は32歳。あの奔放不羈の兆民が龍馬から「中江のニイさん」と声をかけられ、



中江兆民

「尊王討幕と民権拡張」
長崎でのこの挿話は、幸徳秋水によって記録されたものだが、兆民自身も龍馬について何度か書いています。
例えば、明治24年(1891)の『立憲自由新聞』に、兆民は「尊王討幕と民権拡張」と題する一文を寄せた。そのなかで、自由民権運動を幕末の尊王討幕運動になぞらえている。

「坂本竜馬杯云へる胆略に富み機智に豊かなる厄介物が飛込みて、薩長を聯合してより、民権家の勢力頓に盛大と成り、終に伏水の一戦に凱歌を掲ぐる」と成りたり」
伏水はたぶん伏見で、鳥羽伏見の戦いを言ったのだろう。諸国の有志が天下を動かそうとするのは尊王討幕運動も自由民権運動も同じであり、龍馬の薩長連合のように、民権運動も諸勢力が合同連携して政府に立ち向かっていかねばならないと、兆民は論じている。



坂本龍馬

おれを殺しに来た奴

また、明治25年(1892)の論説では、龍馬と勝海舟との出会いを引用しているのが面白い。龍馬と海舟が初めて会ったときのことは有名で、海舟の『氷川清話』によれば、こんな次第だった。

「坂本龍馬。彼れは、おれを殺しに来た奴だが、なかなか人物さ。その時おれは笑つて受けたが、沈着(オチツ)いてな、なんとなく冒しがたい威権があつて、よい男だつたよ」

龍馬が「おれを殺しに来た奴」だったというのは、海舟の言い分をそのまま信じるわけにはいかないだろう。ただ、海舟はこの挿話を人によく語ったようで、兆民も聞かされたらしい。明治の人士も、龍馬のように海外へ向けて目をひらき、大いに羽ばたいていくべきだと、兆民

は述べている。

「近代非凡人卅一人」の一人として

そして、もう一つ注目したいのは、最晩年の著述『一年有半』で、兆民が「近代非凡人卅一人」の一人として、龍馬を挙げていることだ。

31人は、桃川如燕、陣幕久五郎、三遊亭円朝、竹本越路太夫ら、講釈師、相撲取り、落語家、浄瑠璃語りなども多く、いかにも兆民らしい顔ぶれである。幕末・明治の傑物では、藤田東湖、坂本龍馬、大久保利通、勝海舟、西郷隆盛、岩崎弥太郎、福沢諭吉らが挙げられ、伊藤博文、山県有朋、板垣退助、大隈重信らは除外されている。

これを見ると、古来の価値観にとらわれず、誰も足を踏み入れたことのない険しい道を敢然と歩いていった志操ある人物を、兆民は選んでいるように思える。

引用は「中江兆民全集」(岩波書店)、「坂本龍馬全集」(光風社書店)、兆民と龍馬の画像は国立国会図書館デジタルライブラリーから。

“不戦”の龍馬を描く

話題人 インタビュー

「龍馬の魅力にとりつかれて」

仏画から今は龍馬を描くことに夢中

仏画家 江本象岳さん



江本象岳さんとおつきあいは、かれこれ4年。江本さんは、緻密に描かれた日本画の龍馬を片手にひょっこり現われるという風だ。

徳島から来られると、記念館の小さな応接間に大きな体を折り曲げるように座る。隣には小柄な奥様・美千代さん。美千代さんの背筋は伸び、江本さんのまなざしはいつも柔和である。故・森館長との会話も弾んでいた。

常設展示室の一角にある江本さんの作品「龍馬・志士の群像」は、龍馬を中心に龍馬と関わりのあった人たちが特徴をとらえて丁寧に描かれており、多くの人の目を引いている。

坂本権平、乙女、お龍、武市半平太、岡田以蔵、海援隊の面々、勝海舟、徳川慶喜…。総勢五十人と西郷さんの犬一匹。そこにあるのは、写真で見る、あるいは写真のない彼らが一瞬見せる表情、しぐさ。

「仏画専門なのに、龍馬にとりつかれちゃったんです」と笑う江本さんの傍らで、美千代さんは「よく勉強していますよ」とおっしゃる。

昨年に続く二度目の、当館「海の見える・ぎやうりい」での「江本象岳 龍馬絵伝」展(2月1日～3月31日)の開催準備をする江本さんに聞いた。

仏画家への転向

遠く徳島からお越しいただき、ありがとうございます。それにしてもお二人はいつも一緒に、仲がいいですね(笑)。

結婚してしばらくしてから妻の実家、徳島の小松島に帰ったんです。そこで義父が「新聞にこんな記事が出ていたよ」と教えてくれたのが、仏画についての記事でした。

私は熊本の出身で、十代のときどうしても絵描きになりたいと、東京の美術学校に入学しました。そこでは油彩を専門に学びました。女房とは美術学校で知り合い、結婚してもう四十年以上が過ぎましたよ。結婚後しばらくは東京で暮らしました。



転向後に大きな縁が生まれたのです。そうですね。私は洋画から入ったので、スマートで新しすぎるという評もありますが、自分流の、今の仏画があってもいいんじゃないかと思っています。

龍馬に夢中

そういつた江本さんがなぜ龍馬の絵を描き始めたのか。とても興味



な龍馬を描くためにどういうタッチにするか悩むことがあります。それでも私の絵を見た人が共感してくださると、いいインスピレーションが生まれてきますね。

「群像」には会ったこともない幕末の人たちが生き生きと描かれています。ずいぶん大勢いますよね。私はイメージができて筆をとると、描くのは早いです。夢中になるからね。人物を描いていく中で、自然と感情移入していつちゃう。

「主人は必死になってやっています。やる必要があるって幸せですね」。印象的な言葉だった。

容室「半平太。おぬし、わしを恨んでいるだろう」。半平太「いや、めっそもない」。という具合にね。絵の中で会話が生まれる。指の表情つにも思いが入るのです。

人生とともに絵があつたというはよく分かりました。その中で、龍馬を描くということはどういふことでしょうか。私は今まで仏画を1千点以上描いてきました。どうせ描くなら龍馬の絵もそれくらい描きたい。女房も「どうせやるなら自分のやりたいこと、好きなことをやりなさい。苦勞は同じ」と言ってくれます。ありがたいと思っています。

龍馬は和戦(平和と戦争)の両にらみだった。平和志向であつたとしても、戦の用意もした。避けられないものは避けられないと思つたのでしようね。しかし、龍馬を描くうちに私の気持ちは変化しました。やは

江本象岳(えもと しょうがく) profile 昭和15(1940)年熊本生まれ。徳島在住。中央美術学園絵画科卒。油彩から仏画に転じて古画を訪ね、ひたすら絵筆を進める。仏画は、高野山金剛峰寺、高崎観音、慈眼院、京都・大覚寺、智積院、高崎観音、慈眼院、香川・大徳寺ほか多くの寺院に納める。龍王、桜花、富士園などに加え、坂本龍馬や幕末志士たちの群像にも取り組んでいる。

仏画は繊細な線で描いていきますが、龍馬の場合、大胆な線で描く方がいいと思います。しかし、どうしても仏画の描き方がとちかに出ちゃう。龍馬はいつも動いている。歩くか船か。活動的

龍馬たちを描くのが楽しくて仕方ないという感じですね。ご苦勞はないのですか。

龍馬は不運の連続です。しかし、めげない。常に前を見て進む。二灯を提げて憂いなく暗夜を歩く。つまり、暗闇の小さな灯りを頼りに、



前田由紀枝 インタビューアー (まえだ ゆきえ) 現代龍馬学会理事 高知県立坂本龍馬記念館学芸課長

「不愉快な歴史」

宮川 禎一

「歴史認識」という言葉を最近よく聞く。この場合の歴史は政治的な意味であつて、私たちが龍馬を語る際のような歴史ではない。本物の歴史研究者は「歴史的に」とは口に出して言わない。しかし思考はいつも歴史学的であるはずだ。本物の科学者もまた普段から科学的であつて「科学的に」などととは言わない。「科学的に見てですね」などという言葉は「これから数字を使つて皆様を騙しますので引つてかかって下さい」というベテナーの口上だ。「このサプリメントを飲んでお客様に九十二パーセントに健康効果がありました(当社調べ)」を私たちがはじめに受け取りがちなのは「科学的」という言葉に騙されているのである。

歴史の方もまた難しい問題を抱えている。「歴史的に見て」の本音は「そんなことも知らないのか」といふ悪口である。

知らないという前ふりだ。政治家が歴史を持ち出す際はだいたいこんな



中国マカオの書店の入り口に「恭賀新禧」とともに掲げられた赤地に金文字の「龍馬精神」(吉祥句。坂本龍馬とは無関係)

な意味である。一方、学問としての歴史にも民族・国家・地域・宗教・社会的な価値観が必ず反映されている。また個人の生まれた環境や自らの嗜好・自尊心や他者への差別意識から逃れることは難しい。そもそも客観的な歴史などは存在しない。坂本龍馬を取り上げようが経済指数を比較しようが主観的なものである。龍馬を取り上げる段階ですでに主観であり、経済指数を選んだ段階で主観である。本当のことよりも本当であつて欲しいことの方が勝ち気味だ。人間らしい心の動きである。歴史に向き合うことの困難さがここにある。他人の悪口を言うことは簡単だが、自分を客観視するのは難しい。歴史に向き合うことは自己向き合うことだ。しかし容易なことではない。

コラム・龍馬のこと

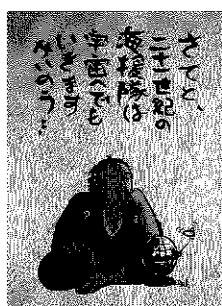
イラスト展「時代を駆ける龍馬」展を終えて 楠本 剛

坂本龍馬記念館での作品展示も5回目を迎え、昨年は「坂本龍馬生誕180周年」ということで、変化する龍馬の歴史を追ってみようと『後世の人々が作った様々な坂本龍馬たち』をテーマにしました。

彼に想いを馳せた人々、そして数々の作品もまた、「坂本龍馬の歴史を継ぐものである」と言えるでしょう。

龍馬さんが亡くなった後、明治から平成に至るまで、小説、映画、ドラマ、そして銅像など、様々な龍馬さんが、それぞれの時代が求めるイメージを背負って登場しました。その中で、各時代ならではの龍馬像を打ちたてたのはこれだ、というものを自分なりに選んでみました。

皆さんそれぞれに、思い入れのある龍馬を演じた役者さんや、龍馬さんを好きになったきっかけとなった作品があると思います。小説『龍馬がゆく』が新聞に連載された頃に生まれた自分にとって、リアルタイムで見てないものもありますが、そこはイメージ、カッコよさ重視で描きたいものを選びました。実際描いてみて、展示してみると、「ああ、あの映画の、あのドラマの龍馬も並べたかったな」と、相変わらず自分の力不足を感じます。



最後に、今回の展示で一番多く反応をいただいたのは、おまけで展示した18年前に描いた絵手紙系イラスト(記念館でのイラスト募集のデビュー作)でした。嬉しい反面、「えっ?それがええの?」という意外な気持ちもありいの…。絵手紙風は当時散々描いて、すっかり飽きてしまっていたのですが(汗)。今年の展示ではてんこ盛りに絵手紙を描こうかな…。

“話してみるかよ”

「温かい言葉」

教員OB 宮 英司

森健志郎館長が急逝された。本当に驚いたし、残念でならない。10月16日にお電話をいただいた。てっきり「レッツゴー ハンド・イン・ハンド」の参加者の集まり具合を心配されていたことかと思いきや、私が提出した(現代龍馬学会研究紀要の)「坂本龍馬は教科書においてどのようにとりあげられてきたか」の原稿のことであった。

「あんなことがあるもんやねえ。まっこと龍馬は教科書に記述される42人の人物の中には、残念ながら入れてもらえなかったけど、その平成元年の教科書から逆に龍馬の記述が増えてきたとはねえ。おまんの言う通り他の幕末の人物を7人も8人も書いたら龍馬のことも書かざるを得んわのお。いやあ、けんど感激したよ。発表を聞いて、原稿を読んだき、よけわかった。できたら、あの原稿を増刷したいけど…。龍馬のことが教科書に十分に載ってないことは、みんなあ知っちゅうけど、そのことによって学習指導要領で規定された時から、教科書の執筆者に逆バネが働いたという分析は初めて聴いた。いや、よかった。また、話そうや。」と一気に話された。

唐突にお褒めをいただいたので、ありきたりな返事を返すのみであった。ただ、日頃の歯に衣せぬ館長の物言いからすれば最大の誉め言葉であったと思っている。

現代龍馬学会の設立やシェイクハンド龍馬像の建立、ハンド・イン・ハンドの企画、新館のホール構想の立案等々、次々と龍馬をメインに据えた企画を打ち出され、成功させてきた森館長。本当にお疲れ様でした。

あの日の温かい言葉が耳元から離れません。「やっぱり龍馬がきちんと教科書で取り上げられるようになるまで頑張らんといかんのお。」